

福島潟におけるオオセッカの渡来状況と標識事例
千葉 晃 (新潟市)

【はじめに】オオセッカ *Locustella pryeri* はセンニュウ科センニュウ属の小鳥で、個体数のごく少ない生息基盤の脆弱な絶滅危惧 IB 類に指定されている。本種の国内における繁殖地は局地的で、先行研究によれば青森県、秋田県、宮城県、茨木県、千葉県に限られ、これら以外では不規則な渡り鳥として位置づけられている。しかし環境の変化や調査努力により、新たな繁殖地（栃木県）や潜在的越冬地（三重県）が追加されつつある。また、本州太平洋側では標識調査により、東北地方で繁殖した個体群は関東地方で越冬し、関東地方で繁殖したものはそこに定住するものと房総・東海地方に渡り越冬するものがあることが明らかになった。これに対し、日本海側における生息や移動に関する情報は繁殖地（青森県・秋田県）に関するものを除けば皆無に等しく、新潟県柏崎市での古い標識例（1967 年 9 月）が挙げられる程度である。演者は 2009 年以來新潟県福島潟でコジュリンの生態調査を続けているが、この過程でオオセッカの出現を認めた。そこで断片的ではあるが得られた結果を整理し、ここに報告する。

【調査地と方法】野外調査は 2010 年から 2016 年まで福島潟の北東沿岸域に広がる放棄田由来の湿性草地（干拓跡地）で実施した。草地内に定めた踏査路に沿って繁殖期（4~8 月）を中心にロード・センサスを行い、出現状況（出現位置と環境、個体数、囀りや行動等）を記録した。使用した主な観察・記録用具は双眼鏡、望遠鏡、望遠レンズ付カメラ及び録音機である。また、所轄官庁の許可を得て標識調査を試み、カスミ網（ATX 2~3 枚）と音声プレイバックによる誘引を組み合わせて捕獲を行った。この他、補足的に自動車による広域調査も試みた。

【結果】上記した 7 年間の野外調査において、2012 年と 2015 年を除く 5 年間に本種を観察あるいは捕獲（3 羽のうち 2 羽を標識）した。本種の出現域は福島潟の北東沿岸を中心とした 4 か所（仮称 A~D 地区）で、このうち B 地区で生息確認が集中した。B 地区では観察年が異なってもほぼ同一場所（広さ約 40m 四方）に出現が限られ、そこは放棄田由来の湿潤な草地で、カサスゲ群落やウキヤガラ群落にヨシ群落が侵入し、パッチ状ないし二層構造を持つのが特徴である。出現時期は 3 月下旬~11 月下旬に及んだが、8 月と 10 月の確認例はなかった。個体数は 1 羽のことが多く、最大数は 2014 年春の 3+ 羽であった。捕獲や行動観察（囀り活動の有無）で判定した限り、出現個体はすべて雄と判断された。繁殖期（5~7 月）の出現は 2010 年、2011 年及び 2016 年で、継続確認日数はそれぞれ 8 日間、7 日間、19 日間であった。注意深く観察したが、雌の存在や繁殖を支持する情報は得られなかった。囀り活動や音声記録を検討した結果、囀りは草茎の上方に止まって鳴く「止まり鳴き」と上空へ飛び立ちながら鳴く「飛翔鳴き」とが区別され、誇示効果は前者より後者が高いものと推察された。